

希望の光を灯すことが町村の歴史的な使命

東京大学名誉教授 神野 直彦

栄えある全国町村長大会にお招きいただきまして、心から感謝の言葉を申し上げたいと存じます。

私は地方財政の研究者といたしまして、いつも歴史や時代が閉塞状態に陥った時に、全国町村会が、必ず未来への指針を示した、ということに敬意を表しております。

振り返りますと、奇しくも今から100年前、第一次大戦で国民の生活が疲弊し、米騒動まで生じた混乱の時代に、三重県七保村の大瀬東作村長が、全国の町村に檄を飛ばし、日本に希望の光を灯そうとして全国町村会は結成されました。結成された全国町村会は、地租と営業税を国税から地方税に委譲する両税委譲運動と、さらには郡長廃止運動などの地方分権運動を推進してまいります。

この全国町村会が展開した地方分権推進運動を、私たちは大正デモクラシーとして讃えているわけです。日本の民主主義の偉大な物語を築いたとして語り継がれております。大正デモクラシーの成果として実現した1926年の第1回の普通選挙では、「地方分権丈夫なものよ、一人歩きで発てんす」という名言が踊ったことは、皆さんご存じの通りでございます。

こうした全国町村会の輝かしい伝統に思いを馳せる時、人間の歴史が混乱して、不安の時代になったといわれる現在こそ、日本の町村が世界の人々を希望へと導く歴史的な使命を果たさなければならないのではないか、と思っております。

世界を見渡すと、憎しみと対立、暴力が溢れ出ています。人間の歴史は混迷を極めている、と言ってよいのではないかと思えます。その原因は誰もが分かっています。人間と人間との結びつきが弱くなってしまったという不安感が世界を覆っているからなのです。

つまり、セネガルの大統領サンゴールの言葉を使えば、「人間は暖かい手と手をつなぎあって、コミュニティを形成して生きていくものなのに、そのコミュニティが崩れて、人間と人間との結びつきが弱くなってしまったという不安感に、人々は怯えている」わけです。こうした不安感、伝統的な共同体を守ろうとする過激な原理主義を呼び覚まします。IS（イスラム国）などの宗教的原理主義は、伝統的なイスラムの共同体を暴力的にでも守ろうとする運動だといっていいかと思えます。

イギリスのブレグジット（EU離脱）の背後には、移民の流入からイギリスの伝統的な共同体が崩されてしまうのではないか、という不安感から生じている国家的原理主義があるのではないかと思うのです。さらに、アメリカでも、

移民の流入によって白人の共同体が崩されるのではないかという不安感によって生じている国家原理主義がトランプ大統領の誕生の背後に見え隠れしている、というように思われます。

人間の歴史が危機的な状況に陥ると、必ずローマ法王が「レルム・ノヴァルム」、これは「新しきことがら」というような回勅、信者に送る回勅ですが、これをお出しになります。1991年には私の恩師でもある宇沢弘文先生がアドバイスして、ヨハネパウロ2世が100年ぶりに「レルム・ノヴァルム」をお出しになりました。

この回勅でヨハネパウロ2世は、現在はこの世界で2つの環境破壊が進行していると指摘されています。1つは、自然環境の破壊です。この自然環境の破壊については、まだまだ不十分ですが、人々はようやくその存在に気がつき始めました。もう1つは、人的環境の破壊です。暖かい手と手をつなぎあって生きていく人間のコミュニティが崩されているという破壊です。ヨハネパウロ2世が、この人的環境の破壊については「人々はその存在すら気がついていない」と警告を発していました。

しかし、日本の町村には、豊かな自然環境のもとで、暖かい手と手をつなぎあうコミュニティがまだ息づいています。私たちは町村を訪れると、懐かしさに感動します。子どもの頃、豊かな自然に包まれて、多くの人々の愛情をふんだんに注がれて育ったことを思い出すからです。両親だけではなく、近所のおじいさんやおばあさん、駄菓子屋のおばさん、さらには駐在所のお巡りさんにも愛情を注がれて育ちました。

時代の心意気は必ず流行唄、流行歌に反映します。当時私たちが育った時代に、どのような歌が流行っていたのか、「金のない奴は俺のどこに來い、俺もないけど心配するな」と歌っていたんですね。人々は貧しくても豊かで安心できる社会だったんです。

私は、日本の町村にこうしたコミュニティが息づいていることを誇りに思っています。日本の町村の使命は、この町村の良さ、豊かな自然環境と豊かな人的環境がある良さを、より発展させて、混迷している未来への導きの灯火になるべきだ、というふうに考えています。

現在は、工業社会から脱工業社会、つまり知識社会といわれている時代に移行する転換期だと考えています。工業社会では、生産される工業製品は腐りませんから、蓄えることが利得になるわけです。ところが脱工業社会、つまり知識や情報が生産される知識社会になると、蓄えるということは美德になりません。美德は、惜しみなく与えあうのです。なぜなら、知識は蓄えても意味がない。惜しみなく与えあって初めて、知識は発展していくわけです。そうだとすると、知識集約産業は、人間の絆としてのコミュニティが息づいている町村でこそ、育つことになるわけです。

農業も、工業化する、というのではなく、自然のメカニズムを適切に学んで、自然を豊かにしていく知識集約農業になっていくわけです。重要な点は、工業社会と脱工業化社会とでは生産と生活の関係が逆転するということです。工業

社会では生産機能工場などが立地しているところに人々が集まってきます。つまり、生産機能が磁石のような磁場になって生活機能を引き寄せていくわけです。ところが脱工業化社会になると、全く逆になります。むしろ、生活する機能が生産機能を磁石のように引き付けていく、ということになるわけです。

つまり、あんな町、こんな村に住みたいというふうに、そういう町村に有能な人材が集まって、地域集約産業が発展していくわけです。生産されるのは人間の神経系統が生み出す知識や情報であって、巨大な機械設備ではなくなるということです。

そうだとすると、人間は豊かな緑の自然環境に抱かれて、豊かな愛情に包まれながら、そういうコミュニティで安心して過ごしたい、生活したいというふうに思うはずです。

子ども達が育っていくには2つの木陰が必要になります。1つは緑の木陰です。木々の緑が作り上げていく木陰の下で子ども達は育つものです。もう1つは、人間の絆が作り出す木陰です。このもとで子ども達は育つのです。自然環境とコミュニティという人的環境の豊かな町村で、優秀な人材は育っていく、ということだと思えます。

この2つの良いものを町村は発展させていくわけですが、発展をさせる、発展をするというデベロップは、エンベロープ（包む）の反対語です。それはなぜか、つまり拓いていくことが発展だからです。内在しているものを拓いていくことこそが発展なのです。卵が幼虫に、幼虫がさなぎに、さなぎが成虫に発展していくわけです。前に存在していたものを拓いていく。外部から圧力を加えて変形すること、例えば木が机に発展したとは言いません。内在しているもの、良いところを拓いていくのです。

日本の町村の良さは、繰り返すようですが、緑豊かな自然環境と、暖かい手と手をつなぎあっているコミュニティが息づいている人的環境にあるわけです。この豊かな自然環境のもとで、暖かい手と手をつなぎあうコミュニティを発展させていく、そのことによって、行き詰まっている人間の歴史に希望の灯火を灯すこと、それが日本の町村の歴史的な使命であるかと思えます。

私は、「日本の町村がこうした歴史的使命を果たせ」ということを、僭越ではございますが、この場から大瀬東作村長に倣い、全国の町村に檄を飛ばしていきたいと思えます。

これをもって私の拙いスピーチを終わらせていただきます。